# 資料館だより

Miyako Kitakamisanchi Museum of Folklore
No.29
宮古市北上山地民俗資料館
〒028-2302 岩手県宮古市川井２－187－1
TEL.0193－76－2167 FAX.0193－76－2933
http://kitakamisanchi.city.miyako.iwate.jp
令和５(2023)年３月31日発行

## ◆企画展「山里の暮らしと保存食」開催

第25回企画展は令和4年10月1日から12月25日までの会期で、これまで当館が行ってきた聞き取り調査のうち、主に北上山地の中央部に位置する宮古市の山間部で作られていた保存食やその作り方を紹介する展示を行いました。

現在も、災害時等の備えとして水や食料を保存しますが、冷凍や冷蔵の技術が普及する以前、自給自足が主流だった頃の食生活は、保存食が普段から大切な位置を占めていました。食糧をやりくりしたり、工夫して食い延ばしを図ることを「そうぞく」といったそうです。山の恵みなど旬のものや、たくさん収穫した畑作物を保存食に加工することで、食べ物が不足する時期や、予期せぬ不作に備えて、家族の食事をまかなえるように計画的に考えられていました。この地域では、主食となるヒエ、オオムギ、ダイズの3つの作物を、2年かけて1つの畑で栽培しましたが、それに加えて、春には山菜、秋には木の実を採集し、また秋から冬にかけてはそのほかの雑穀類や畑作物など収穫した作物で、あるいは通年をとおして川漁で得た魚などから、さまざまな保存食を作りました。そうして保存食を活用して長い冬や農繁期を乗り切り、あるいは凶作による畑作物の不足を補うとともに、木の実のあく抜きやワラビ根からでん粉をとるなど自然のものを食料として利用する知識や技術も伝承され、飢饉に備えていました。

展示では、冬期間の寒さを利用した凍結乾燥による寒冷地ならではの「凍みイモ」や「凍み豆腐」の作り方、クリやシダミなどの木の実や川魚の保存と加工についてなども紹介したほか、「これさえあれば飢饉を乗り切ることができる」といわれたほど大切な食料だった味噌作りについても紹介しました。

ここで、川魚で作る保存食「マスの塩辛」について古舘徳雄さん(江繋地区)にお聞きした内容を紹介します。

・「マスの塩辛(しょがら)」を作った。保存食だった。

・作り方は、骨を除き、皮のまま身を厚めに刻み、「わた」についている川虫を丁寧に取り除き、「わた」も一緒に醤油、麹、塩で[かめ]に漬けた。[かめ]は蓋のかわりに布をかぶせて紐で結んでおくものだった。炉の脇に置いておき、 [どんざ](綿入れ)を上からかぶせて保温して発酵させた。秋に作るものだった。

・保存には一升びんを使った。[かめ]に漬けたものをすくって[じょうご]を使ってびんに移した。びんの口は蓋をせず、発酵して中身が吹き飛ばないように、空気が抜けるようにワラを栓として詰めておいた。一升びんの状態で他の家に配ったりもした。

・食べるときは、一升瓶から皿などに移して、[さじ(スプーン)]ですくって熱いご飯にのせて食べる。または、平たい[おちょこ]に盛って、酒のつまみにした。炉端で「塩辛(しょがら)」をつまみに酒を飲むおじいさんのひざに座って昔話を聞いたのが思い出。

(古舘徳雄さん・宮古市江繋地区)

企画展では、聞き取り調査の内容をもとに、主食となるヒエの栽培を中心に、植物の開花や鳥の鳴き声といった「自然のこよみ」を読み解きながら行われてきたかつての農作業に、保存食のサイクルを組み合わせた「暮らしのこよみ」についても紹介することができました。

企画展「山里の暮らしと保存食」展示の様子

## ◆ミニ企画展の取り組み

今年度で２年目となる試みで、当館１階ロビーを会場に、川井生涯学習センター、市立図書館川井分室との3館共催で計４回開催しました。テーマは地域の歴史や自然を紹介する内容で、展示では資料や写真のほかに、関連の書籍も紹介しました。自然関連の展示では、ミニ企画展を見るためにご来館くださった方も多くいらっしゃいました。

「いわての神楽・みやこの神楽」展示の様子

「早池峰山ろく　木(気)になる花(実)」展示の様子

「夏休みワクワク昆虫」展示の様子

「みやこの鉱物」展示の様子

次に展示の概要を紹介します。

| タイトル（会期） | 内容（来場者数） |
|---|---|
| 第１回<br>「いわての神楽・みやこの神楽」<br>（4/29～5/8） | 県立図書館巡回展「いわての神楽」にあわせて開催。市内の神楽について、現在は伝承活動が行われていない神楽についても紹介。早池峰山の北側に位置する門馬地区に伝えられていた「門馬神楽」の神楽面等を展示。<br>（来場者133人） |
| 第２回<br>「早池峰山麓　木（気）になる花(実)」<br>（6/1～30・会期延長～7/18） | 身近にある樹木や、早池峰山などの高山まで行かないと見られない樹木にはいったいどんな花が咲き、どんな実をつけるのかを写真で紹介。地域の自然愛好家や自然保護指導員などの方々から写真250点あまりをご提供いただき展示。<br>（来場者281人） |
| 第３回<br>「夏休みワクワク昆虫展」<br>（8/2～21） | 岩手虫の会の三浦秀明さんから昆虫標本をお借りして、夏休み期間にあわせて展示。<br>8月7日には、夏休み特別講座「チョウの標本を作ろう！」として三浦さんを講師にホソオチョウの標本作りの講習会を開催。<br>（来場者200人、講習会8名） |
| 第４回<br>「みやこの鉱物」<br>（2/15～3/31） | ラサ工業で使用されていたタイプライターが寄贈されたことをきっかけに開催。市内にあった鉱山の概要や産出した鉱物について紹介したほか、川井地域の「夏屋砥石」、「小国菊寿石」を紹介。田老鉱山に関連してラサ工業の大煙突のジオラマも展示。<br>3月25日には、関連事業として市文化財保護審議委員で市三陸ジオパーク推進協議会学術アドバイザーの柳澤忠昭さんによる展示解説と岩石についての学習会を開催。<br>（来場者200名、学習会16名） |

## ◆第3回小国分館神楽共演会開催

6月26日、晴天のもと3年ぶりに開催することができました。江繋早池峰神楽、末角神楽の両保存会（どちらも市指定無形民俗文化財）にご協力いただき、「打ち鳴らし」から始まり、「翁」、「山の神」、「勢剣」、「三番叟」、「一草」、「普勝」、「権現舞」をご披露いただきました。ゲストには区界の田代年佛剣舞保存会（県指定無形民俗文化財）をお迎えしました。市内はもちろん県内外の各地から100人を超える観客の方々にご覧いただくことができました。来場者からは、「続けるのは大変と思いますが、続いてほしいです。久しぶりに権現様にかんでもらって最高です」、「舞もロケーションも素晴らしかったです。再開していただきありがとうございました」などの感想が寄せられました。

江繋早池峰神楽保存会「勢剣」

ゲスト「田代念佛剣舞保存会」

会の運営には当館ボランティア「小国分館友の会」と、かわい元気社の皆さんにご協力をいただきました。

末角神楽保存会「権現舞」

## ◆第3回小国分館水車の畑まつり開催

10月16日、小国分館で保存管理する市内で収集された有形民俗資料の公開を目的に開催しました。

「昔の技術と自然の素材で小物作り体験」やソバ打ち体験のほか、 当館ボランティアのアイディアで実施したウオークラリーは、広い館内と敷地内を、クイズを解きながらめぐるもので、参加者に楽しんでいただけたのではないかと思います。参加者からは「昔の生活を知ることは良いことだと思います」、「遠くにいるのでなかなか見ることができなかったが、見学できてよかった」などの感想が聞かれました。

この季節にしては屋外でも過ごしやすい気温のなか、70人以上の方にご来場いただき、道の駅やまびこ館や里の駅おぐにからの出店もあり、イベントを楽しんでいただくことができました。

水車の畑まつり・小物作り体験の様子

水車の畑まつり・ソバ打ち体験の様子

## ◆自然観察会を開催（5月15日、22日）

「薬師川の古生界と小国流紋岩」をテーマに、市文化財保護審議委員で市三陸ジオパーク推進協議会学術アドバイザーの柳澤忠昭さんから、県道25号沿いの7カ所のポイントで解説を受けました。岩石を観察しながら、年代にすると4千万年前から4億6千万年前までの期間をおよそ3時間でめぐったことになります。参加者からは「岩石の特徴に着目して大地の成り立ちを考えることにロマンを感じました」などの感想が寄せられました。定員を越える応募があったため、急遽2日に分けて開催しました。24名の参加者があり、関心の高さが伺えました。

薬師川流域で岩石の解説を受ける参加者

## ◆石碑見学会を開催（8 月 21 日）

この石碑見学会は、道しるべや石工などのテーマを決めて地域の石碑を見学する内容です。5 回目となる今回は、江戸時代に宮古街道をはじめとする閉伊地方の道路開削に半生をささげた牧庵鞭牛和尚の「道供養碑」をテーマに開催しました。昨年度に続くテーマで、今年度は閉伊川の中流から下流域を中心に4か所の石碑をめぐり、あわせて玄翁館の展示も見学しました。10名の参加者は講師である市史編さん室の假屋雄一郎室長から解説を聞いて興味を持ち、「長沢地区の史跡十三仏もめぐりたい」などの要望も出されました。

花原市・華厳院の参道にある道供養碑

## ◆森の体験学習会を開催（5月26日、10月6日）

早池峰山の北側登山道握沢コースの3合目から5合目までを散策し、登山道の自然や歴史を学ぶ学習会を開催しました。かわい木の博物館案内人の武内寛さんより樹木、植物、チョウや時折聞こえる鳥の声のほか、アイオン沢が合流する付近では、早池峰山北面に位置する天然記念物の「アカエゾマツ自生南限」についても解説を受けました。5合目付近には石の鳥居があり早池峰山が山岳信仰の山として、また恵みの山として里の人たちからも信仰を得ていたことを伺い知ることができます。

春も秋もそれぞれに楽しめましたが、両方に参加した参加者からは「季節ごとの変化を感じることができ、とても楽しかった」と感想が寄せられました。

森の体験学習会（春）

## ◆ボランティア研修会を開催

当館には「小国分館友の会」という、イベントや体験学習などにご協力をいただいているボランティア団体があります。その皆さんと、3年ぶりとなる先進地視察の研修会を行いました。釜石市の世界遺産「橋野鉄鉱山」ではボランティアガイド会の三浦勉会長から、また釜石郷土資料館では職員の方から、それぞれ分かりやすい解説をいただき、大変、刺激を受けた研修会となりました。

釜石郷土資料館にて

## ◆「子ども歴史・自然教室」を開催（7月28日）

子どもたちと一緒に地域の歴史や自然を学ぼうと、初めて企画しました。川井小学校放課後子ども教室の皆さん他14名が参加し、小国地区地域づくり委員会の横道廣吉さんの案内で市指定史跡「大梵天館跡」に登り、伝承についても教えていただきました。同じく市指定文化財の「大圓寺」から山頂まで遊歩道が整備されており、子どもたちはクワガタを見つけたり、きれいな夏の花を観察したりしながら楽しんで歴史を学ぶことができました。

市指定史跡「大梵天館跡」頂上の案内板で記念撮影

## ◆夏の工作、冬の工作（8月5日、1月6日）

当館では毎年、夏休みと冬休みの期間にあわせて、工作教室を開催しています。夏の工作教室では、崎山貝塚縄文の森ミュージアム職員による出前講座で、革製のキーホルダーを作る体験をしました。実際に石を割って石器を作ったり、革を石器で切ったりする体験をとおして、参加者は縄文時代の人たちの暮らしの様子に思いをめぐらせたようです。また、冬の工作教室では当館職員が講師となり、［まさかり］の刃の部分を保護したり、安全のため取り付けられた刃掛けの編み方で、麻ひものストラップ作りをしました。

［まさかり］の「刃掛け」の説明を受ける参加者。この後ストラップを作る。

## ◆伝統的食文化伝承活動講座（5月25日、12月8日）

「大福とおこわ作り」の様子

地域に伝わる雑穀を使った郷土料理の作り方を学ぶ学習会を開催しました。1回目は岩手県食の匠認定者で宮古地方食の匠の会会長の神楽栄子さんから、15名の参加者が大福と「おこわ」の作り方を教わりました。2 回目は門馬地域振興センターを会場に、区界高原そば生産振興組合の皆さんを講師に、10名の参加者がソバ打ちに挑戦しました。試食のあと移動し、区界高原ウオーキングセンターでの見学や押し花コースター作りを通し、ソバの名産地である区界地区について理解を深めました。

ソバ打ち体験の様子

## ◆布ぞうり作り方教室（7月24日、11月20日）

当館では昔ながらの技術を伝承する目的で、いくつかのもの作り体験の講座を開催しています。この講座は、以前は藁ぞうりの作り方教室として開催していましたが、現代の暮らしでも使うことができるものを、ということで布ぞうりの作り方に変更して毎年開催しているものです。それでも、藁細工と同じ技術の一端も体験していただきたいと、横緒の部分をひもで「左縄」をなう作業からはじめています。

当初、地元の方を講師にお願いしていましたが、次第に職員が習い覚えて講師を務めています。作り方を伝承することが目的の一つでもありますので、この教室の参加者の方から講師となっていただける方が育ってくれればと思い、毎年開催しています。

布ぞうり作りの様子

# ◆ 館 長 コ ラ ム ◆

## 今 年 度 も 来 ま し た ！ 小 学 生 た ち ！

毎年1月から2月中旬にかけて、市内の小学校数校の児童3年生が当館の見学にやってきます。ちょうどそのころ、社会科の授業で「昔の暮らしについての学習」があるためです。当館には、まさにそのものが展示されており、児童たちは、興味深く、熱心に観察していきます。また、事前に質問事項が提出される場合がほとんどなので、それらの回答なども含めた当館学芸員の説明や解説に聞き入っています。一生懸命にメモを取る子らもあり、中には、学芸員泣かせの質問も数多く出てきます。訪れた児童の大半は、展示している資料をみると、「これなあに？」というのが第一声です。昭和30年代に収集されたモノたちばかりなので、見たことも聞いたこともないのは当然といえば当然なことなのです。

博物館法第3条第1項には、博物館が行うべき事業が掲載されていますが、大きくみると、①資料の収集・保管・展示、②専門的な調査・研究、③教育・普及に関する事業等の実施、となっており、更に、同条第2項には、「博物館は、その事業を行うに当たっては、土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、更に学校教育を援助し得るようにも留意しなければならない。」とあります。懇切丁寧をモットーに各学校の見学や体験学習に対応しているところです。

さて、道具は、時代の経過とともに変遷するものです。道具を作る素材にしろ、その姿かたちまでが大きく変わっていきます。なかには、今では使われなくなって廃れてしまったり、新たな仕事の発生に伴い作り出されたりする道具もあります。しかしながら、このように道具の変遷をみていくときに大事なことは、縄文時代の釣り針にしろ、つい最近まで作られていた木製の桶にしろ、展示資料には目に見えない“技術”・“技”が織り込まれていることです。道具を実際に作る職人がいて、受け継いできた技があるのです。道具の素材が変わるということには、こういった道具を作るという技術も変わったり、技術そのものが廃れていったりと技術そのものにも変遷があるのです。そういった観点からも展示資料を見ていただけると、また違った視点も生まれてくるかと思います。

旧川井村地域では、樹皮を編んで籠（かご）などの製品や藁を編んで作った草鞋（わらじ）などを作る技術をもった方々がたくさんいました。しかし、今ではほとんどいません。継承者がどんどん減っているのです。当館では、「昔ながらの技術で樹皮を使った小品づくり体験」を行ったり、食文化伝承講座なども年数回程度ですが開催したりしています。これは、継承者を育成していきたい、樹皮や藁を編む技術・技法を伝えていきたいという目的もあります。とはいえ、1回限りの講座ではなかなか難しいというのが現状ですが、こういった講座の積み重ねも大事なことなのかとも思っています。

それと同時に、当館の学芸員・民俗資料調査員は、昔の技術を持っている数少ない方々に連絡を取り、その教えを請い、映像記録などに残すことや、聞き取り調査も行っています。今年度は、「つかり」や「みの」、「ほうき」などの作り方を教わり、習得しました。

また、新型コロナウイルス感染拡大防止のために自粛していた聞き取り調査も十分な注意を払いながら再開したところです。人口減少、高齢化が進行し、こういった聞き取り調査の重要性はますます高くなってきているというのが実感です。今後も、継続的に実施していきたいと考えています。それは、当館に限らず、博物館・資料館には、そういった役割もあると思っているからです。

当館の設置目的である「北上山地の民俗を伝承する（資料館条例第１条）」ためにも、「小国分館友の会」をはじめとする地域の皆さま方からのご協力も賜りながら、できることに職員一丸となって今後も取り組んでいくとともに、当館のことをもっと知ってもらえるような、情報発信にも努めて参ります。

宮古市北上山地民俗資料館長　鎌田祐二

## ◆学校授業等での見学

館長コラムでも紹介した、学校授業等での見学の様子を紹介します。今年度は、市内川井、高浜、津軽石、新里の各小学校の皆さんが見学に訪れたほか、小国保育所のお別れ遠足や、川井中学校の職場体験、花鶏学苑の皆さんが体験学習でご利用くださいました。出前講座では川井小学校放課後子ども教室の皆さんと正月飾りを作る体験をしました。

高浜小学校の皆さん

新里小学校の皆さん

川井中学校職場体験の様子

小国保育所の皆さん

高浜小学校の皆さん

花鶏学苑の皆さん

川井小学校の皆さん

津軽石小学校の皆さん

放課後子ども教室にて

## ◆体験メニューや情報発信など

今年度、当館で実施している体験メニューをPRしようと、「体験学習ガイド」のリーフレットを作成しました。このリーフレットでは、「昔の技術の自然の素材で小物作り体験」をテーマに当館で実施しているの体験メニューの内容を紹介しています。

また、それぞれ行われた体験メニュー実施の様子は、その都度当館ホームページやフェイスブックページ(右側の QR コードもしくは、当館公式ホームページアドレスから↓下記↓)でも紹介しますので、是非ご覧ください。

北上山地民俗資料館ホームページアドレス
http://kitakamisanchi.city.miyako.iwa

【QRコード】
(左)北上山地民俗資料館公式ホームページ
(右)北上山地民俗資料館公式フェイスブックページ

## ◆ご協力ありがとうございました!! (50 音順)

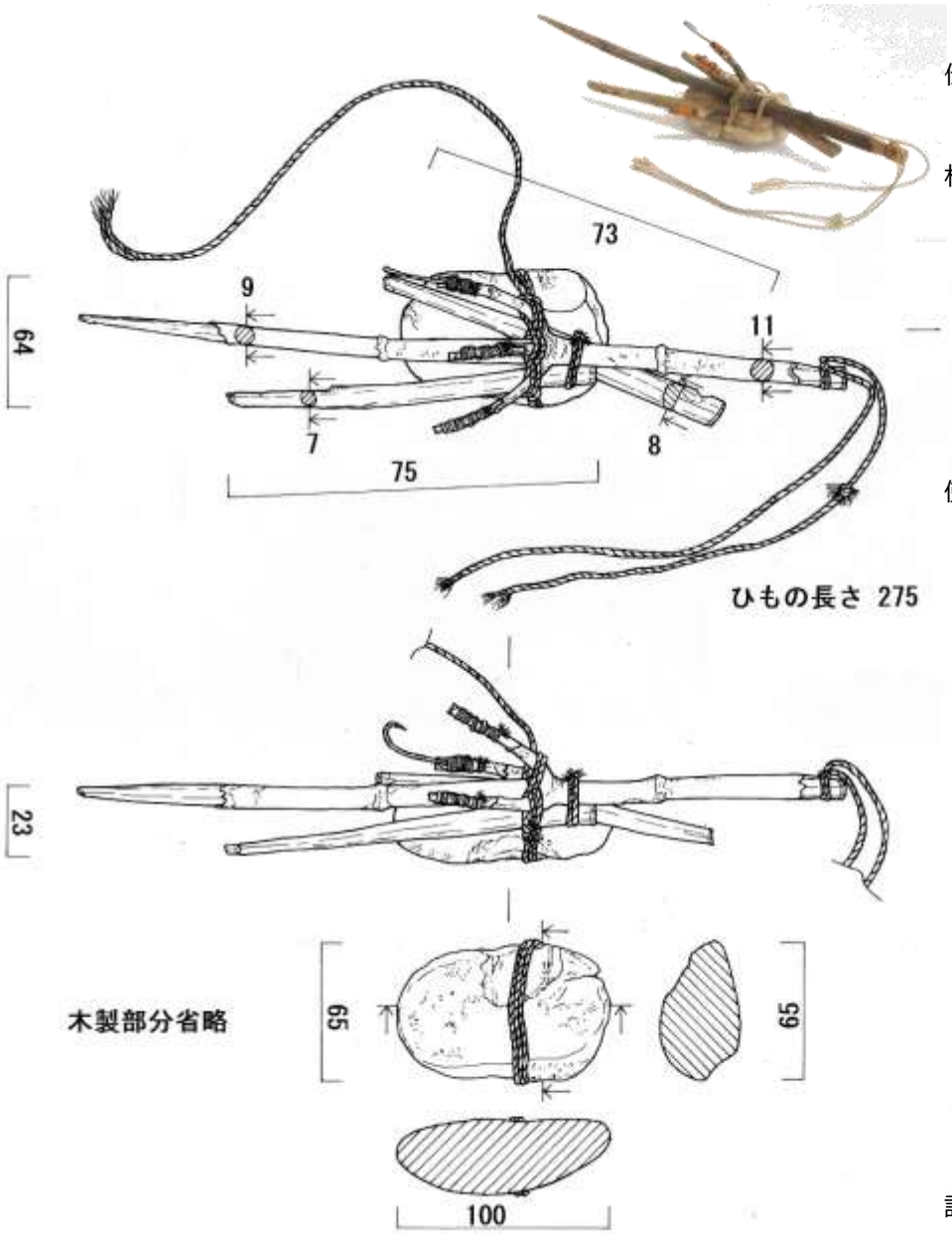
【資料寄贈】令和４年４月１日～令５年３月31日まで
菊池俊一様、佐々木史香様、島津茂子様、田畑拓夫様、中村文子様、橋本クニ様、八木武子様、道又邦彦様

【聞き取り調査等協力】(〃)
伊藤隆司様、菊池俊一様、佐々木松夫様、田畑拓夫様
畠山俊良様、古舘徳雄様、松本文雄様、山代生様

## ◆令和4年度の入館者数(人)

| 一般 | 学生 | 小･中･高 | 団体 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 1,278 | 11 | 189 | 212 | 1, 690 |

# ［タコ引き］



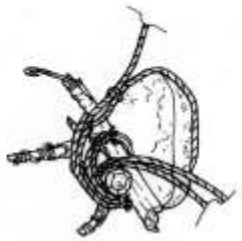

※実測図の寸法はmm（ミリメートル）

資料名　［タコ引き］（［いさり］ともいう）

伝票番号　16186

収集地　旧田老町

材　質　木の枝、石、針金、紐



使用方法　針にサンマなどの切り身をつける。紐を持って船の上から本体をゆっくりと海中に沈める。石に結わえ付けてある3本の枝のうち中央の長い1本が海底に届いたのが分かるので、そうしたら船の上から「ツクツクツクツク」と紐を引っぱりながら海底を動かす。そうすると石の［重り］が下になり、針の部分が上を向き、針に付けたサンマの切り身がヒラヒラと動く。それに誘われてタコが切り身に抱き着く。タコが取り付けば重くなるので、「来たな」と思って引き上げる。そうやってタコを獲る道具。

話　者　松本文雄さん　畠山俊良さん
（2002年11月記録）

作図者　櫻岡咲子さん

## ◆漁具資料の聞き取り調査について

平成二十九年に当館小国分館に移設した旧宮古市、旧田老町、旧新里村で収集された有形民俗資料について、まず漁具資料から整理作業と聞き取り調査を行っていくことをお知らせしておりました（当館「資料館だより」二十七号）。その後、新型コロナウイルス感染症のため、対面でお話を伺う調査が難しい状況が続いていましたが、今年度ようやく三名の方から三十二点の聞き取り調査を行うことができました。今回の「資料紹介」ではその中からタコを獲る道具を紹介します。

実測図の担当者と資料を観察しながら、どうして真ん中の一本だけ長いのか、疑問に思って考えたものの、なかなかその理由にたどり着くことはできませんでした。漁の経験がある話者の方からお話を伺ってはじめて、真ん中の一本を長く作ることがこの道具の工夫された点であることが分かりました。あわせて実際に道具を動かして見せていただいたことで、この部分が石の「重り」とあいまってタコを誘う動きをするための大切な役割を果たしているということがとても良く理解できました。

聞き取り調査の大切さを常に考えながらも、久々の調査でお聞きした話はとても興味深く、お聞きした内容をきちんと記録し、資料とともに伝えていかなくてはと、心を新たにしました。

主査兼学芸員　高橋稀環子